よって、一般市民が事の重大さに気づき、これに応えて出産意欲を高める可能性があるという意味で、物的条件の充実にも第2義的に賛成する。）

第5に、本源的な人間の「自然」なあり方に帰ることが必要である。夫婦二人が自然に受け継いだ命を二人の子供に継承するのは「自然」であるし、望んでも生めない人や結婚しない人の分を加えて三人生むのも「自然」なことではあるまいか。

自らの豊かな生活に執着して結婚しても子供は生まないとか、1人しか育てないというのは一種の「短期快楽主義」とみなされないか。なぜなら社会全体を長期に見ると、人口の再生産を実現しなければ人口構成にマイナスのヒズミが生じて極端な高齢社会が実現し、そのままでは社会の活力が減退し、結局、大きな危難が全成員に還って来るからである。若い時期にいくらか楽が出来ても老後に、あるいは次の世代に大きなツケが廻って来るからである。

このことに深い思いをいたすとき、人口の置き換え水準程度に出生力を確保し、人口構成に望ましいバランスを保つこと（三人程度生むこと）はエコロジカル・デモグラフィック・インペラティブズ（ecological-demographic imperatives）と考えてよいのではあるまいか。

人間が作り出した豊かさという人工的「文化」が本源的な人間の「自然」を蝕ばみ衰退させることはあってはならない「亡びの道」である。生き物である人間は本源的「自然」を確保してはじめて、「文化」を創造することが可能となるのである。

その他の参考文献

①河野稠果『世界の人口』東京大学出版会　1986年　第4章
②阿藤誠編『先進諸国の人口問題』東京大学出版会　1996年
③M. S. タイテルボーム、J. M. ウイニター・黒田俊夫・河野稠果『人口減少』多賀出版　1989年
④古田隆彦・西部百貨店IDFプロゼクト室編著『人口減少ショック』PHP研究所　1993年
⑤大淵寛『出生力の経済学』中央大学学術図書　1989年
⑥河野稠果・岡田実編『低出生率をめぐる諸問題』大明堂　1992年
⑦人口問題審議会『人口減少社会、未来への責任と選択』ぎょうせい　1998年
⑧国土庁・調整局『地域の視点から少子化を考える』大蔵省印刷局　1998年